

「準備期間が足りない」 「どうアピールすれば」

短期決戦に焦り

県内、大学生の就活解禁

大学3年生の就職活動が解禁された1日、県内でも多くの学生が厳しい「戦線」を勝ち抜くために早速、活動を開始。大学主催の企業説明会に臨んだり、学内の求人票を厳しい表情でチェックする姿が見られた。今年の就活は解禁が例年より2カ月遅い。短期決戦で、学生からは「準備期間が足りない」「どうアピールすればいいのか」など、戸惑いを漏らす声が聞かれた。



企業側の説明を熱心に聞く学生たち
=1日午後1時40分ごろ、八戸市

1日午後、八戸市内のホテル。八戸大学と八戸短期大学が開いた「合同企業研究会」では、学生が県内外の企業の採用担当者との面談に臨んだ。参加者は約100人と昨年を30人ほど上回った。(解禁が遅い分)早く動かなければという危機感の表れでは「と、八戸大の猪股清美就職支援課長。学生は銀行や食品会社などのブースを回り、各社の担当者と真剣なやりとりを繰り返した。

就活の解禁は2カ月遅いが、企業が内定を

出す時期は変わらず、期間短縮の影響で企業説明会が減ることが予想される。「就活を何から始めたらよいか分からなかった」と同大の坂本友里恵さん(20)。「準備期間が短く、正直焦りしかない。必死にいろんな企業を回り、自分の進む道を選ばしかない」。

青森市の青森中央学院大学では、キャリア支援センターで朝から学生がしきりに求人票をめくり、職員に相談する姿が目立った。「本当は地元で働きたいが...」。黒川祐貴さんの(21)は厳しい県内の雇用情勢にため息をつく。青森労働局の調べでは、来春卒業予定の現4年生の内定率は10月末時点で49・9%。黒川さんは、自分たちが4年生になる来年も厳しい情勢は変わらないとみている。「限られた時間で、どう企業にアピールしたいのか。狭き門を突破するのは、甘くないはず」。最近、県外就職も選択肢に入れ始めたという。

同大の平出道雄センター長は今年の内定情報について「東日本大震災に加え円高が企業の採用意欲に影響し、就職活動はなお厳しさを増すと思う。限られた時間の中、効率よく、そして積極的に説明会を回らなければいけない」と分析した。

一方、弘前大学の学生就職支援センターは、数人の学生が求人情報確認に訪れるなど、解禁前と変わらない状況だった。弘前学院大学の就職課でも慌ただしさは見られなかったが「期間が短くなって、切羽詰まった感じを受けている」と山内一透さん(21)。砂原大佑さん(21)は「夏までに内定を取りたい」と話した。